

アーノルド・トインビーの肖像
——歴史学から比較文明学への道——



(A. トインビー 1889-1975)

吉澤 五郎

目次

- 一 「トインビー生誕一二〇周年」を迎えて
トインビー思想の現在
- 二 「グロバーバリゼーション」論の指標
——トインビーの知的履歴
- 三 「ギリシアへの愛」と超克
トインビーの比較文明学
- 四 「近代歴史学」の彼方に
——二一世紀の文明史像とトインビー

一 「トインビー生誕一二〇周年」を迎えて

新たな二一世紀の開幕は、周知のように、国連の「文明間の対話国際年」(二〇〇一年)として始まった。他ならぬ「文明」という全体論的な概念が、新しい世界秩序を読み解くキーワードとなる。しかし現実には、「新しい冷戦」の暗雲がたちこめ、むしろ対話を拒む「文明衝突説」の驕りも深い。今日、二一世紀とともに「第三千年紀」をも迎える。とくに、人類文明史の根本的な変容として、二一世紀をつつむ「第三千年紀」の意味は重い。ちなみに、西欧キリスト教世界での「千年紀」(ミレニアム)問題は、たんに千年を画する数値というより、一種「黙示録」の恐怖と希望を秘めた「世の終わり」に対する懸念が深い。

ところで、二一世紀を覆う難問は、基本的に「文明のパラドックス」という観点から捉えるべきであろう。その歴史的な淵源は、本来文明の誕生問題に遡るともいえよう。もとより、文明社会の礎となる「農業革命」は、食糧生産の増加と技術的な進歩による人類史の発展を約束するものであった。しかし、その代償として、経済的な格差と階級分化という社会的なひずみを背負う身となった。その矛盾と相克は、不幸にも歴史上の構造的な差別と破壊的な戦争への道を拓いた。今日、このような「文明」概念の

二律背反的な両義性が醸す、重大な試練と超克の狭間にあるといえよう。

現代文明は、その命運を賭けた運命的な岐路に立っている。問題の核心は、とりわけ近代文明の「人間の原理」を中心とする「上昇のダイナミズム」が、一部の楽観主義をこえて「文明の同時崩壊」という死の記号を秘めることである。現況は、一方に科学・技術文明の恩恵として、人類の夢を託した「世界の一体化」が実現し、さらに人間の知的地平と物質的な富もはるかに増大した。

他方、今日世界にはびこる核拡散の脅威や「グローバリゼーション」の波は、超大国の政治的対立や南北間の経済格差を助長し、病める「地球と人間」の症状を深めている。現に地球上では、まだ三万発をこえる核兵器が貯蔵されている(「国際原子力機関」報告)。いわば、地球そのものが危険な火薬庫となり、人類の生存を脅かしている。他面、続発する地域紛争や迫害等から逃れ、強いられた移動下にある難民の数は、すでに三千二百万人にも達している。さらに、「一日一ドル以下」の生活にあえぐ人びとは十三億人にのぼる。冷戦後の今日も、「平和の配当」から除外された貧しい人びとの悲惨な姿は消えない。

ところで、今日の流行語となる「グローバリゼーション」

（グローバル化）という概念は、まだ言葉の多用と乱用の渦中にあり、かならずしも「共有された定義」をみない。一般的な意味では、さしずめ昨今の経済・技術の国際化やアメリカ主導の世界市場化を指すことになろう。もつとも、広義にみた「グローバルゼーション」の原像は、人間本来の「移動する人間」（ホモ・モビリティクス）とその地理的な拡大を基本としており、それ自体を悪とするものではない。少なくとも、その基本概念は「一つの全体」としての世界認識であり、さらに今日の状況としての「世界の縮小」から、とくに国家をこえる相互関係の望ましい調和と進展を期するものであろう。

今日、経済の自由化や情報技術等の発達により、ますます世界の相互依存性は深まり、「グローバルゼーション」の急速な進展をみている。もはや、かつてのように主権や領土概念に加護された神聖不可侵の国境も徐々に消失し、自由な人口移動や情報交換も可能になった。つまり、従来の「一国の国際化」といった、国家主体の世界参画や伝播とは趣を異にしている。反面、現代世界の情景は、とくに西欧およびアメリカ等先進国の経済戦略として、世界市場の独占化と一元化にある。いわば、冷戦型イデオロギーの残像ともいえる、強者の「力の論理」を盾とする「一つの価値」の支配と強制が潜んでいる。

このような、世界大の「同質化」と「多様化」の波に揺れる対抗形態は、現に「グローバルイズム」と「反グローバルイズム」をめぐる激しい闘争として展開されている。身近には、ちょうど最新技術のシンボルとして世界を駆け巡る「レクサス」（トヨタの国際的高級車）と、伝統的価値のシンボルとして人びとの心に根づく「オリーブの木」のせめぎ合いとして語られたりする。また、日常風景の「マクドナルド化」現象として、人間の合理的な均一化や機械化に対する危惧の念も深い。

とりわけ、今日にみる「グローバルゼーション」の進行は、世界の不均等な発展から新たな序列を現出した。いわゆる、「開かれた社会」の極度の変形と危機をまねく事態となった。とくに、アメリカのグローバル覇権や一極支配構造のもとに、極端な市場万能主義や競争主義の罠に陥っている。その結果、一連の「地球規模の問題群」として、資源枯渇や貧困問題さらに環境汚染や気候変動等の異変が押し寄せることになる。他ならぬ、人間の総体的な不安状況を告げる「グローバル危機」の到来である。

今日、国連大学を中心に提示された「グローバル危機」（世界危機—World Crisis）の特徴は、たんに「政治・経済」上の危機（五百年）に留まらない。その全体の様相は、すでに武者小路公英氏が人類史的な危機として描くように（『平和研究』、二七、

日本平和学会、二〇〇二年)、さらに「文明」の危機(五千年)から「生活・生命」の危機(五百万年)にまで遡及する。いわば、相互に時間系列の異なる「三つ巴の危機」が、同時に進行するという前代未聞の悪夢である。事実、人類と生命圏の未来は、深い憎悪に満ちた戦争およびテロ行為の連鎖や、また自然環境の破壊と生態系の悪化等によって、他ならぬ「宇宙船地球」号の運行を危うくしている。眼前の「グローバル危機」は、広く文明史および生命史をも含む根源的な危機をはらんでいる。現代に課される大きな試練と挑戦は、一面これまで人類文明史が営々と築いてきた「負の遺産」ともいえよう。

他方、この緊急事態に際して、国連が唱導する「人間の安全保障」(Human Security)問題が登場する。この新しい理念は、国連開発計画の「人間開発報告」(一九九四年)として発表されたもので、現下のグローバル化を一因とする「人間と地球」の破壊に対する告発でもある。いまや、国家主体の軍事的な安全保障だけでなく、人間中心の視点に立つ包括的な安全保障の概念と方策が要請される。それは、これまで、主として先進諸国が強行した経済重点主義に対して、とくに人間の生存をはじめ生活や尊厳性等の深まりを期した「人間の顔をしたグローバル化」への目標転換である。この「人間の安全保障」の遂行は、日本外

交に課せられた重要な任務の一つでもある。また、二一世紀の平和構築に向けた最大の挑戦である、といえよう。

申すまでもなく、現代文明の位相は、まさに人類文明史を画する大変動期にある。すでに、最初の世界史家・ポリュビオスが大著『世界史』(全四十巻、B・C・E・二二一―一四四年)の冒頭で明言したように、新しい歴史状況下では、ことに人間事象の諸出来事を統一的に把握する「全体的な研究」が不可欠である。いわゆる、世界的な認識として、人類の「共有遺産」を築く全体的な視点と意味解釈が求められる。これまで、人類史上を飾る自己表現も、全体の表象として、単一の普遍性と多様な固有性の相互媒介性にある、といえよう。

今日、とりわけ「新しい世界史」像の構築として、「個別と普遍」の両者をつなぐ総合への「特別の意欲」が必要であろう。その先達の一人として、「二〇世紀最大の歴史家」とも謳われたアーノルド・トインビーの姿がある。このほど(二〇〇九年)、折しも「トインビー生誕二二〇周年」を迎えた。トインビーは、いち早く今日の「地球文明」にかなう新しい世界史像を大成し、明日の人間と文明の命運を真摯に問いかけた。いま、二一世紀の道標として、その歴史的知見と洞察に学ぶ意義は深い。本稿では、あらためてトインビーの知的肖像を描きながら、その卓抜な知的

挑戦の本質と現代的な意味を明かすことに努めたい。

二 トインビー思想の現在

——「グローバリゼーション」論の指標

まず、現下の「グローバリゼーション」の潮流に関して、トインビー独自の観察と主要な論点を提示したい。もともと、このグローバリゼーションに連なる「市場経済」の命運については、いち早く第三世界に立つ経済学者によって、すでに精緻な実証分析と展望が試みられている。たとえば、新たに経済人類学を主唱したK・ポラニーの『大転換』（一九五七年）や、従属学派を代表するA・アミンの『不均等発展』（一九七三年）等である。両者の明敏な洞察と移行戦略は、とりわけ「南北問題」の経済格差と犠牲を強いられた第三世界の人びとに、大きな希望と自信を授けたといえよう。

今後、とくに「グローバリゼーション」論の課題として、従来の「近代主義」や「経済主義」に偏らない多次元的な視点と、広く人類文明史を鳥瞰する巨視的な把握が求められよう。その有望な論鋒として、まずR・ロバートソンが主張する「宗教的アプローチ」（『グローバリゼーション——地球文化の社会理論』、一九九

二年）に注目したい。ロバートソンは、おもに宗教社会学の立場から、世界史上の歴史形成に果たす宗教的な超越価値の役割を重視する。先学のM・ウェーバーを範とすれば、名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九〇四―五年）に裏書きされるように、近代資本主義が誕生する「経済倫理」の作用を無視できない。とくにロバートソンは、近代社会科学で軽視された宗教・文化的な要因に光をあて、さらに「非西欧世界」の歴史的な活力と国際的な参入を例証する。

一 先ず、今日注視される「ファンダメンタリズム」の台頭を例にとろう。いわゆる、「宗教と政治」の緊張関係は、一九世紀末来のアメリカ・プロテスタントでの発祥と復興だけでなく、広く「イラン革命」（一九七九年）もふくむグローバルな透視図の中で検討される。その運動の根底には、宗教的な関心と政治的な関心の融合を見ることができよう。また、「前近代」（ブレ・モガン）のグローバリゼーションの情景は、文明統合の原理となる諸宗教の興隆として、仏教、キリスト教、イスラーム等が同等に描かれる。さらに、「脱近代性」（ポスト・モダニティ）の課題は、グローバリズムの多様な推進として、いわゆる全体論的な「個別主義の普遍性」あるいは「普遍性の個別的な表出」として言及される。すなわち、新たな規範としての「グローカーゼーション」

（世界化とともに地方化する）の提唱である。

このようなロバートソンの見解は、目下「グローバリゼーション論」の主流ともなる、いわゆるI・ウォーラステインの『近代世界システム』（一九七四年）や、A・ギデンズの『近代性の帰結』（一九九〇年）への厳しい批判ともなる。この両者の命題は、独自の斬新な企図にもかかわらず、一部の経済的あるいは近代的な特殊性を主眼としている。いわば、深遠なグローバリゼーションの潮流を読みとる「壮大な物語」が欠落している、といえよう。昨今、身近な状況としても、とりわけ世界同時不況による深刻なグローバリゼーションの挫折を見ている。二一世紀の新たな自己革新として、やはり普遍的な高度宗教や人間倫理への展望を欠くことはできない。あらためて、ロバートソンの形而上学的な思考をそえる「グローバリゼーション・パラダイム」の意義に注目したい。

つぎに、トインビーの「文明史的アプローチ」を概観しよう。

トインビーは、新たに比較文明学の視座から、世界史的な諸文明の変動と命運を探究する。その畢生の大著『歴史の研究』（全十二巻、一九三四―六一年）は、文字どおり「人類の歴史を一つの全体」として鳥瞰する壮大な知的挑戦であった。いわば、今日大海に漂流する「グローバリゼーション」の歴史的な位置づけと海

図の作成である。とりわけ、今日のような大変動期には、全体的な視点と解明が不可欠である。ちなみに、アインシュタインの格言を準用すれば、これまで「科学上の偉大な発見も、より包括的なヴィジョンへの冒険を試みた人物による」ともいえよう。

現在、すでに時・空間の両面にわたる「世界の一体化」が、世界的な規模で浸透している。トインビーは、まず自己偏見として自らに巣くう「西欧的な思惟形式」の克服につとめる。さらに、近代ヨーロッパを中心とする一元的な「文明の論理」に抗して、非西欧文明をも等しくつつむ多元的な世界史像を考案した。いわば、既存の歴史学をこえる知的装置が、他ならぬトインビーを先達とする「比較文明学」の誕生となる。その指標と基本性格は、世界史的な諸文明の遭遇と変容を明かす、いわゆる「巨視的な視点」と「関係性の認識」にあるといえよう。そこに、今日の「文明間の対話」を促す実践的な課題を見ることができよう。

ところで、トインビーは、今日の「グローバリゼーション」を予見するかのよう、いち早く独自の論考を著わしている。以下、その主要な論点と変遷を辿りながら、トインビーの全体像と現在性を究明したい。第一点は、「世界の合一化」と歴史的展望である。ちなみに、基本文献は『試練に立つ文明』（一九四八年）である。同書の主題は、広く世界史上の文明形成から、今日の世

界の一体化と命運を究明することである。とくに、広範にわたる「西洋化」の盛衰と非西欧文明の台頭を検証しながら、人類存続に不可避な世界共同体として「世界政府」(World Government)の構想を練ることになる。このように、新たに世界史の転換問題として、自ら「ヨーロッパの矮小化」を跡づけ、未来の方位を展望する視点は重要である。

他面、トインビーは、この「世界の合一化」の明暗と課題について、独自に精神的な観察をそえている。いわゆる、近代の開幕となる「ダ・ガマ以後」の根本的性格として、物理的な「距離の絶滅」と精神的な価値の分離という「モラリティ・ギャップ」(道徳上の断絶)の問題がある。すなわち、西洋史学の泰斗・鈴木成高氏の明察のように、今日の「世界の一体化」は、あくまでも「産業革命」によるのであって「精神革命」ではなかった、といえよう。そこに、いわば「最高のコミュニケーション」が「最大のデイス・コミュニケーション」をもたらずという、今日の矛盾と悲運がある。トインビーは、この深遠な断層こそ、現代文明の危機の本質として捉え、その拡大を人類破滅の最大要因としている。

歴史的に追跡すれば、一方に近代科学・技術の加速度的な進展として、一八世紀の「産業革命」から「運輸革命」および「電力

革命」、さらに今日の「原子力革命」にいたる。他方に精神的な基盤は、かつて「高度宗教」の始祖たちを輩出した時代や、K・ヤスパースの命題となる「枢軸時代」に較べて後れをとり、むしろ悪化している。トインビーは、かつて「不朽のローマ」の崩壊が、他ならぬ「精神的な支柱」の喪失にあったことを説いている。今日、過度なグローバル化の軌道修正として、新たに人間性の回復や価値解釈の変更が求められる中で、トインビーの視点を黙過することはできない。

第二点は、「二つの世界」を主題とする「世界国家論」である。その基本文献は、『変化と習慣——現代が受けている挑戦』(一九六七年)である。いわゆる、人類存続の現実的な要請としての、新たな「世界国家」(Universal State)の歴史的な回顧と展望である。トインビーは、あらためて人類文明史上の律動として、「分化性」と「統合性」の両極に揺れる歴史的動態を総点検する。その歴史的な検証として、一方の「分化性」の大潮は、狩猟・農耕時代から現代にいたるまで、まだ根強い勢力をたもっている。現に、国際社会の状況は、人種・民族間の紛争もつきず、また諸国家の対立・文明間の衝突もあとを絶たない。他方の「統合性」の主調は、世界統合の夢を育んだ初期の「シュメール文明」をはじめ一連の「世界国家」群も、ついに世界の統一と平和の使命を

果たすことはできなかった。また、高度宗教の具体的な制度である「世界教会」(Universal Church)も、これまで全人類の帰依と救済の成就を見ることはなかった。

トインビーは、このように歴史上の多元的な「分化性」と普遍的な「統合性」の二大潮流を吟味しながら、つぎに新たな「世界国家」の可能性と蓋然性を明らかにする。その具体的な構想の一端にふれよう。まず、世界国家の市民とも言うべき担い手として、歴史上の「ディアスポラ」(離散民)に注目する。いわゆる、世界国家の前提条件となる「国家をこえる存在」の証明である。事実、ディアスポラの活動と社会構造は、宗教的および文化的さらに職業上も、すべて横の連携で維持される。いわば、水平的に広がるディアスポラ共同体の共存形態は、これまで一定の領土に根づく国民国家の垂直的な支配構造をこえることになろう。

そのディアスポラ共同体の歴史的な結晶が、かつてオスマン帝国が採用した「ミレット制」(宗派別自治共同体)である。それは、非イスラーム教徒を対象とした、宗教を基軸とする統合的な共存様式である。トインビーは、このミレット制について、一部の限界があるものの、歴史上の「分化的」傾向を「統合的」傾向に転化する希望の証としている。このような「世界国家」の構想は、まだ青写真に留まるものの、新たな人間の価値志向と居住条

件の提示としても示唆に富んでいる。

なお、トインビーの晩年の著作である『図説・歴史の研究』(一九七二年)は、これまでの『歴史の研究』の完成を期したものである。他方、人類社会の将来に対する危惧の念は深い。ことに、近代西洋文明を苗床とする過度の工業化に警鐘を鳴らし、新しい脱工業化の主旨から中国を核とする「東アジア」の役割に期待を寄せる。その末尾には、一連の地球環境問題に言及し、とくに「核拡散、人口爆発、環境汚染」等の問題を具体的に解析しながら、「世界国家」(World State)の現実的要請を強調している。その、地球環境問題への具体的な指摘は、今日に照らして正鵠を射ており、先見の明をうかがわせる。

さらに、トインビーの遺著となる『人類と母なる大地』(一九七六年)は、トインビー思想を集大成したものである。すなわち、現代にいたる世界全体の歴史を公平に大観し、かつ広く「生命圏」の運命を問いかけている。そのまなざしは、人類文明史の究極的な問題として、「母なる大地」の子である人間存在の神秘と謎にせまる。いわゆる、人間自身の「内なる自然」の内省として、新たな「生への選択」を前にした矛盾と苦悩の多様な道程を描いている。

ことに、トインビーの絶筆となる「暗中模索」(『一歴史家の宗

『教観』第二版、序文、一九七九年）では、「自己の真実」として学問と信仰の狭間で悩む姿が投影される。むしろ、その知的苦悶と高次の緊張感が、他のおよばない独創的な開眼と深遠な洞察を誘うのであろう。トインビーにみる人生の晩鐘と告白は、いわば「人間の自己革新」の問題として、これまで検討した「グローバリゼーション論」の根源的な課題ともなろう。あらためて、トインビーの全体的な考察と論点を省みるとき、その人類文明史上の巨視的な解明とともに、とくに人間存在の奥義を質した意味は深い。いわゆる、二一世紀の「文明共存説」に導く「グローバリゼーション」の比較文明学として、その知的挑戦の意味と功績は大きい。

なお、付記すれば、第一回の「国際比較文明学会」(ISCSO) オーストリア・ザルツブルク、一九六一年)は、P・A・ソローキンを初代会長とし、またトインビーを理論的指導者として、多彩な顔ぶれのもとに開催された。その折のシンポジウム・テーマは、文明の概念や方法・理論等の基本問題をはじめ、文明の未来にわたる「一つの世界」と「世界史の問題」であった。その主題設定は、現下の「グローバリゼーション」研究に対する、他ならぬ比較文明学の先駆性と知的有効性を告げるものであろう。

三 トインビーの知的履歴

—「ギリシアへの愛」と超克

かねがね、創意を秘めた知的開拓者の航跡には、いくどかの象徴的な転機を見ることができよう。トインビーの場合も、その例外ではない。ここで、トインビーのおもな知的道程と主題の変遷を辿りながら、その内的意味と必然性を明らかにしたい。申すまでもなく、トインビーが「最初の愛」を捧げた学問は、伝統的な「古典ギリシア」であった。母校のオックスフォード大学では、ギリシア・ラテン語の厳しい修練をつみ、その俊英として将来を囑望された学徒の一人である。ちなみに、ギリシア古典文学の大御所として名高いギルバート・マレーは、彼の恩師でありまた義父にあたる。トインビーの初期を飾る著作『ヘレニズム—一つの文明の歴史』(一九五九年)も、その委嘱をうけての出版であった。

通常、この「ヘレニズム」と言う言葉は、一九世紀の文芸評論家マシュー・アーノルドに端を発し、さらに同世紀の高名な歴史家J・G・ドロイセンによって「ポリス的人格」をこえる一大概念となる。すなわち、アレクサンドロス大王の東征およびそれを継ぐ「後継者」の時代を指している。とくに、旧来の「墮落と衰

退」という否定的な刻印ではなく、むしろ古典ギリシアからローマ帝国への橋渡しの時代として高く評価された。一方、トインビーのヘレニズム観は、いわゆる独自に「ヘレニック文明」と命名し、ギリシアとローマを一体として包含している。かつその地理的分布も、エーゲ海領域から東アジア、インドおよび西の北アフリカ、ヨーロッパへとわたり広範である。また、そのヘレニック文明の世界観となる自己中心的な「人間崇拜」の罪過が、それを継ぐ近代西洋文明から現代文明にいたる「驕り」として、新たに糾弾されることになる。

一般に、ギリシアへの関心は、日本のみならず欧米においても、アレクサンダー大王以前の「古典ギリシア」に集中している。ちなみに学界動向を一瞥しても、「古典ギリシア」の研究者は、ますます増大し、多様なテーマの実証的な研究も進展している。しかし、その後のヘレニズム・ローマ時代への関心はしだいに薄くなり、また中世ビザンティン時代とオスマン帝国支配下の時代は、それぞれ別の専攻となっている。さらに、独立以来（一八二七年）の近・現代ギリシア史は、いまや省みられることも少ない。現状は、先進文明としてのオリエント文明との脈絡を絶ち、かつ中世以降から近・現代史にわたる歴史性が脱落している、といえよう。厳密に追求すれば、まだ「ギリシア」と「ロー

マ」は明確に区分されている。さらに、そのギリシアは古典期以前とヘレニズム時代に、またローマは共和制期と帝政期に細分化されて別の領域となることも多い。

この点、トインビーの問題関心は、古典古代からヘレニズム、中世のビザンツ時代、さらに近・現代史の全体を包含している。まさに、旧来の専門・分化した「時代区分法」をこえる、文字通り「ギリシア全史」の鳥瞰図である。ちなみに、彼の最晩年の著作である『ギリシア人と彼らの遺産』（一九八一年）は、まさにトインビーの全体史観を告げる包括的な視野と洞察に満ちている。すなわち、ギリシア人の歴史と文化について、その発端より現代にいたる総合的な解明を図った会心作である。このように、トインビー史学の原点にはギリシアがあり、しかも全ギリシアを熟知した稀有な学者であった、といえよう。

ところで、トインビーは、第一次世界大戦中の有名な「ツキウ・ディエス体験」（一九一四年）を通して、学問的故郷としてのギリシアから、激動する現代史に大きく開眼することになる。その動機には、かつてオックスフォード大学で学んだA・ジマンの知的刺激もあろう。しかし、すでに第一次世界大戦を前に「ヨーロッパの火薬庫」の一部となったギリシアでの「生の体験」が、ナシヨナリズムの限界を見とる契機となり、もう一面の「国際関係

論」の草分けとして活躍する第一歩となった。

いま「古典古代」は、年代学的な枠組みをこえて現代の命運を解く一つの鍵となる。かつてのように、西洋文明のよすがとして、伝統的なアカデミズムに胚胎する「永遠の規範」ないし「耽美的・観照的」なギリシア観と袂を分かつことになる。このような、歴史学的関心の時間的・空間的な拡大と知的総合の試みこそ、トインビー史学の新たな命題となり、壮大な比較文明学の道を開く礎石になった、といえよう。

他面、孤独を強いられたトインビーにとって、少数ながら良き理解者として登場するのが、E・D・マイヤーとJ・フォークトである。マイヤーは、古代地中海を主題に、いち早く「普遍主義」的な観察方法を導入している。また、トインビーの『歴史地図』（一九五八年）出版の際には、一知友として共同編集の任も務めた。さらに、このマイヤーを師とするフォークトは、歴史学の人類史的課題として「普遍的世界史」という明確な目標を提起している。その熱き願望を託した著書が、『世界史の課題——ランケからトインビーまで』（一九六五年）である。なお、第一回「国際比較文明学会」（一九六一年）の際には、このフォークトもトインビー共どもに指導的な役割を果たしている。このように、トインビーの知的苦悶と大きな飛翔には、同僚のマイヤーやフォ

ークトといった卓越した古代史家の「公正な評価」と支持があったことも見逃せない。

これまで、「古典ギリシア」の亡霊は、ルネサンス期の古典愛好者をはじめとして、いくどとなく、しかも一方的な形で呼びもどされてきた。今日、そのギリシアも、従来の不動の規範をこえる、新たな探訪と見直し作業が見られる。日本では、樺山紘一氏が『異境の発見』（一九九五年）を著している。いわゆる、ギリシアの他者を包含する「文明体験」から、新しい自己発見の歴史過程を追跡し、いわゆる「他者としてのギリシア」像にせまっている。また、伊東俊太郎氏は、『十二世紀ルネサンス——西欧世界へのアラビア文明の影響』（一九九三年）を著している。とくに、独自の「文明交流史観」や「地中海モデル」の援用から、時・空間にわたるギリシア文明の多元的な解明を手がたく論証している。いずれも、「ヨーロッパの誕生問題」に関する新たな認識であり、かつ日本からの発信として注目したい。

さらに、日本における「古代ギリシア—ローマ史」研究の重鎮である秀村欣二氏は、その著『トインビー研究』（二〇〇二年）において、トインビーの広大な視野と新しい観点を高く評価し、同時に「トインビーを全く無視して、二一世紀の歴史学の発展がありえるか」と厳しく問いかけている。

四 トインビーの比較文明学

——「近代歴史学」の彼方に

つぎに、「歴史家トインビー」の新たな肖像について、とくに近代歴史学の明暗を跡づけながら検討したい。もとより、一科の「学問としての歴史学」が誕生するのは、一九世紀前半のドイツにおいてである。その、「歴史学の世紀」の先鋒をつとめたのが、レオポルト・フォン・ランケ（一七九五—一八八六年）である。周知のように、彼は「近代歴史学の父」あるいは「客観的な歴史叙述の父」として史学史上に名をとめている。

ところで、ランケ史学の核心は、なによりも歴史的事実を直視する個体的な考察を基礎づけ、また厳密な史料批判の方法を開拓したことであろう。いわゆる、「史料中心主義」と「歴史的個体主義」の立場である。ランケが自ら言明するように、歴史学は「それが本来どうであったかをたんに示す」だけであり、また「歴史における個体的生命の考察が、比類なき独自の魅力をもつ」ことになる。もとより、歴史は歴史をして語らせるべきである。その信条は、おもに理性の同一性を説いた「啓蒙的歴史観」への反逆でもあった。

もつとも、ランケのいう事実や個体としての特殊性は、まだ普

遍的なものとの関連で捉えられている。ランケ史学ないしF・マインツケが名づける「歴史主義」(Historicism)の重要性は、とりわけ事実を超歴史的思想から開放し、歴史認識の独立性を確立したことであろう。ここに歴史学は、初めて「科学」としての名誉ある地位を授かり、近代歴史学の装いを整えることになる。

他面、後続の自称「ランケ学派」の成熟と権威の独占は、かえって人間の創造力を麻痺させ、学問の硬直化と退廃を招く事態ともなった。いまや歴史学は、極端な相対主義に落ちこみ、対象の専門化と細分化に身をけずることになる。いわば、歴史に対する過度の信頼が、歴史の過剰によって自己を見失った、ともいえよう。かつて、ヨーロッパの思惟が体験した「最大の精神革命」とも謳われた「歴史主義」の前途に、不吉な暗雲がたがよう。すなわち、歴史研究の主体性と全体的な展望が欠落し、やがて価値の分裂に遭遇する。このような「悪しき歴史主義」の進行に、もはやランケ的段階の形而上学的な面影や普遍への意志を見ることはできない。歴史学は、たんなる「事実のための事実」という収集学に化し、また歴史家は知性をもてあそぶ「史料の囚人」として幽閉される身となった。

ここに、歴史学が実証科学の名のもとに生の問題関心を離れ、

自ら「歴史のための歴史」として方位喪失の運命を辿ることになる。このような、近代歴史学が陥った「歴史主義」の不毛性と危機に対して、とくに価値のニヒリズムと相対主義的な思考をめぐる多くの論議が交わされた。この大問題に対峙する知的高峰として、一方に、E・トレルチの大著『歴史主義の諸問題』（一九二二年）やF・マイネッケの労作『歴史主義の成立』（一九二六年）がある。各々に「歴史主義の克服」の道として、「現代的文化総合の立場」を掲げ、また「過去と現在との統一性」が説かれることになる。他方、それに先立つF・ニーチェの『生に対する歴史の利害』（一八七四年）は、歴史主義の重庄と退廃に対する鋭い告発でもあった。

さらに歴史的な状況として、二〇世紀の第一次世界大戦（一九一四―一九一八年）は、歴史全体を揺るがす大きな危機感を誘った。かつて、「地球の珠玉」とまで謳われた西欧文明の退潮も、もはや否定しえぬ現実となる。その波紋は、歴史そのものへの問いと懐疑を深め、またヨーロッパの思想界にも大きな衝撃をあたえた。一例として、M・ハイテッガーの「故郷喪失」あるいはG・マルセルの「人間喪失」といった言辭は、他ならぬ文明の失調と病いを衝いたものであった。つねづね、歴史の危機的な体験は、深遠な思想や歴史意識を呼び覚まし、卓抜な歴史叙述を生み

出すことも多い。歴史学の分野でも、その例外ではない。あらためて、伝統的な「近代歴史学」に対する学問的な反省と、「西欧の超克」としての世界史への道が模索されることになる。

いわゆる、「現代史学」の誕生は、転換期の歴史学が有する学問的な必然性を前提にして理解すべきであろう。その基本課題として、世界的な立場に立つ「全体としての歴史」の探究と、現実関連性としての「意味賦与」の問題がある。ちなみに、その知的境位を、これまでの近代歴史学と対比してみよう。前者の見地は、歴史の「個性記述的立場」から、普遍的な世界史認識に脱皮することである。後者の見地は、過度な「史料中心主義」から、実践的課題への主体的な息吹を回復することである。このような、歴史研究における世界的立場と方法的意識は、一部の歴史的修正や再構築というより、むしろ新たな知の形成として「比較文明学」の誕生を促すことになる。その基本視角は、なによりも一種の「知と権力」の威信を染めた「近代・一九世紀パラダイム」の二つの原則、すなわち「ヨーロッパ中心主義」と「ディシプリン（専門個別科学）の自律性」を超克することである。

トインビーは、この壮大な比較文明学の体系を築いた先達の人である。その知的航跡は、名高い「二つの主著」によって象徴されよう。申すまでもなく、『歴史の研究』（一九三四―六一、一

九七二年」と『国際問題大観』（一九二五―五六年）である。前者は、人類文明史の包括的な研究である。後者は、現代に生起する国際問題の総合的な研究である。いずれも、歴史的な「文明変動論」を基軸とし、とくに「西洋化」の歴史的位相と命運が問われることになる。いわゆる、トインビーの「歴史的な関心」と「現在の関心」の相関性から、現代の国際問題にひそむ底流と本質的な意味が解読される。その超領域的な独自の視点と方法は、もはや近代歴史学のいびつな「史料学」と袂を分かち、また古典的な国際政治学の「勢力均衡論」とも趣を異にする。その世界史と国際政治の両極を結ぶ知的結晶は、高次の歴史的知見と哲理に昇華され、独自に未来を見据える深い洞察となる。

とくにトインビーは、人類文明史を広く鳥瞰し、その全体論的な視野から諸文明の相互理解と共生の道を探求した。とりわけ、現代歴史学の課題は、伝統的な偏見や自己中心性をこえ、いわれない憎悪を和解に導きながら、全人類共通の知的基盤を築くことであろう。その意味で、歴史家は「まだなすべきことをしていない」ともいえる。トインビーは、世界史を構成する巨視的な単位を「文明」とし、その構造と変動についての広範な「比較研究」から、これらに通底する共通価値と課題を提示した。その試みは、近代の「西欧パラダイム」として近代歴史学に巣くう、狭

隘な「国家中心史観」や「一元的発展論」の超克を目ざしたものである。

さらに、トインビーの探究は、たんに客観的な学問志向だけでなく、現代の地球的危機に対する主体的な対決を秘めている。すなわち、人類共同の「平和への希求」として、現代文明の歴史的な定位と命運を解明する。今日人類は、これまでに類を見ない「地球と人間」それ自体の滅亡に遭遇している。この人類史的な課題に対して、歴史家はあたかも「なにこともないかのように」自己の専門に没頭していいのだろうか。本来歴史の研究は、たんに過去への逃避や該博な知識の温存に尽きないはずである。むしろ、新たに生への参与として、歴史上の変化と価値を読み解く叡智を灯すものであろう。トインビーは、その使命志向科学を彩る「理論と歴史」の接合につとめ、つねに自己超克の巨視的な視点から、人類史の総合と実践的な課題を追究した。いわゆる、歴史の価値基準として、著者の生きた時代と著作の必然的な関係性が、新たに問われることになろう。

もつとも、トインビーの文明史学は、一面「過去に対する新しい見方」として伝統的な歴史学との断絶を見ることになる。それだけに、専門史家の間でも「賛否両論」が渦巻くことになった。事実、一流の史学雑誌である『イギリス史学評論』や『アメリカ

史学評論』および『近代史学評論』等は、長年にわたりとトインビーを黙殺している。一般の論調は、概して冷淡で否定的であったといえよう。いわゆる、従来の科学的な性格を重視する歴史学の逸脱として、また歴史叙述に理念を持ちこむ方法論への批判から、辛辣な批判を浴びることになる。ちなみに、トインビー批判のおもな論点は、一、基本概念である「文明」の定義、二、文明の設定と比較的方法、三、歴史の形而上学的な解釈と宗教観、四、新たな文明の目標と近代文明の歴史的位位置等にわたる。

他方、トインビーの広大な歴史的視野と偉大な構想力に心を惹かれ、またその卓抜な学識と豊富な事例引証は驚きの念をあたえた。じつは、トインビー批判の風向きを創造的な批評に変えたのは、とくに比較文明学の心得を宿すP・A・ソローキンやR・クールボーンの登場を待ってのことである。ここに、新たな創意をこめた論評の一端に目をとめよう。アメリカ人類学の巨星とされるA・クローバーは、「比較という肥沃な領域を發展させようとして、意識的にこの領域に入ってきた歴史家」として、その勇氣と洞察に共鳴している。また、古代ローマ史の泰斗であるJ・フオークトは、歴史科学の方法に準拠する「普遍的世界史」への道程を、あえて「ランケからトインビーへ」と明示している。さらに、卓抜な中世史家のC・ドーソンは、「歴史研究は、文明の研

究を包含してしかるべきである。むしろ限定された歴史は一面的かつ不完全である」と自己批判をもつてのぞんでいる。いま新たに、トインビーの真正な理解と評価の爽やかな光景として、心新たに觀賞したい。

もともと、人間の認識能力に限界がある以上、博覧強記のトインビーにとっても誤謬や脱落があろう。また、その概念規定や理論構成上の不備も免れないだろう。たとえば、「文明の定義」に関する曖昧性や抽象性の問題があり、また「文明の設定」に関する歴史的分析や規定等の問題がのこる。とりわけ、身近な「近代文明」の低評価は切実な関心事でもある。他方、一群の専門家は、トインビーが登場する歴史的な必然性、すなわち新たな研究の本質的な意図や研究方法に対して、必ずしも冷静な分析と正当な評価をもって応えたわけではなかった。一般に、伝統的なアカデミズム特有の習性として、既存の学問体系の固持と、新しい研究動向への警戒心も否定できない。トインビーの面影として、ひそかに「真に問題性をもつ、非正統的な歴史家」の命運を垣間見ることができよう。

トインビーの見解は、自らも述べるように、「完結した結論」として唯一の可能性を説くというより、むしろ歴史の真実を問う一つの「重大な序論」として理解する方が妥当であろう。一連の

「トインビー批判」に関しては、まず結論の承認とは別に、その知的挑戦の本質的な意味を理解する「内在的な批判」と、頭ごなしの否定に立つ「外在的な批判」を区分する必要がある。さらに、トインビー評価の価値基準も再考されねばならない。その点、トインビーに造詣の深い神川正彦氏も証言するように、既成の歴史観や価値基準に留まれば、当然「否定的な評価」となる。他方、新しい世界史への開眼と価値基準に照らせば、大いなる画期として「肯定的な評価」に浴するだろう。トインビーの文明史学は、なによりも新たな知的挑戦として、近代科学の根本的な見直しであることを銘記したい。

ところで、トインビーは、諸家の多くの批判に応える『歴史の研究』（第十二巻、「再考察」、一九六一年）を刊行している。同書は、自説を慎重に再検討し、先の文明の概念や設定をはじめ大幅な改訂をみている。それは同時に、比較文明学内部での実質的な対話の道を開く契機ともなった。晩年のトインビーが、それこそ全人的な誠意と努力を捧げた「再考察」は、トインビー批判への対話と応答として、また新たな比較文明学の前進と拡充にとっても重要である。今後のトインビー研究にとって、まずこの「再考察」に赴き、あらためて自己検証する意味は重いといえよう。ここで、日本におけるトインビー研究の足跡と特徴について、

その一端を二人の先達から省みたい。まず、山本新氏は、『トインビーと文明論の争点』（一九六九年）を著している。とくに、トインビーの新鮮な考察を広く比較文明学の命題につなぎ、その批判的超克として大文明主義を修正する「周辺文明論」を提示している。つぎに、梅棹忠夫氏は、『文明の生態史観』（一九六七年）を著している。おもに自然的要因を加味した生態学の立場から、「トインビーの挑戦」に対する応答として、新たな文明区分と世界史像を提唱している。とりわけ、日本にみるトインビー研究は、両者のように既成の権威におもねることなく、しかも主体的で独創的な成果を育むものであった、といえよう。

五 二二世紀の文明史像とトインビー

さいごに、二二世紀の文明史像とその実践的な課題に照らして、新たにトインビー思想の真価と有効性を吟味したい。まず、今日の国際社会が直面する「重要課題」について、おもに国連の「国際年」（テーマ）を跡づけながら検討しよう。申すまでもなく、国連による「国際年」の制定は、国際社会がその年次を通じて共通に取り組むべき「グローバル課題」を提示し、国連総会の決議として採択される。これまで、「国際地球観測年」（一九五七

年)を端緒とし、とくに「国際婦人年」(一九五七年)以降は、具体的な行動計画を定めて世界的な注目を集めている。

先述のように、二一世紀の開幕は「国連文明間の対話年」(International Year for the Dialogue among Civilizations—二〇〇一年)として始まった。その趣旨は、とくに人間の根源的な同一性と歴史的な共同性の洞察から、異なる文明間の痛みを分けた対話を通じて、人類共生の「グローバルエトス」(人間共通の価値観)を求めたものである。また、トインビー生誕二二〇年を迎えた昨年(二〇〇九年)は、「国連国際和解年」(International Year of Reconciliation)であった。いわゆる、二一世紀の新千年紀から一〇年を経た。あらためて、戦争等の惨禍から将来世代を救う平和的な手段として、他者を「善良な隣人」とする敬意と寛容のまなざしから、積極的な和解プロセスの発展を期したものである。

さらに、今年(二〇一〇年)の国連国際年は、「文化の和解のための国際年」(International Year of the Rapprochement of Cultures)および「国際生物多様性年」(International Year of Biodiversity)にあたる。前者の「文化の和解のための国際年」は、平和に向けた宗教間・文化間の対話と意義を再確認し、とくに寛容による相互理解と協力の促進を呼びか

けている。その制定は、文化的な多様性こそ「人類文化の豊かな源である」とする、「ユネスコ」(UNESCO)総会の決議と勧告に負うものであろう。また、先年、ユネスコの支援を受けた「国際宗教学宗教学史会議」(IAHR—第一九回、二〇〇五年)が東京で開催された。その総合テーマは「宗教—相克と平和」であり、国連テーマの問題提起を深める学的討議であったといえよう。

後者の「国際生物多様性年」は、近年とくに生物の多様性が失われており、その損失速度の顕著な低下を目標として、過去に類を見ないほどの斬新な実践計画を要請したものである。その制定は、先行の「国連環境開発会議」が採択した「生物多様性保全に関するアジェンダ二一」等を下地としている。なお、今年は「国連生物多様性条約」の第一〇回締国会議(COP 10)が名古屋市で開催される。現に、地球上の豊かな生態系は、他ならぬ人間の活動によって侵食され、多くの生物種が地上から消え去ろうとしている。この国連国際年は、新たな環境問題への警鐘だけでなく、より根本的に「宇宙における人間存在」の意味と根基を問いかけるものであろう。

以上に垣間見た、国連の「国際年」テーマは、いずれも二一世紀の「主要課題」として、地球的問題群の危機的様相と緊急の行動計画を要請している。いわば今日、「人類史の折り返し点」と

も言うべき地球規模の大変動期にあり、新たな座標軸と「生への選択」が迫られている。問題視角は、まず人類史上に達成した「生態系から文明系」にいたる多様な業績を、あらためて新しい関係性の相のもとに総体として見直すことである。さらに、旧来の情性に連なる「近代ヨーロッパ・パラダイム」をこえる、新たな知的創造が求められよう。二一世紀の知の希望は、とくに、つぎのような価値志向と規範によって導かれることになろう。第一は「未来への志向」であり、第二は「他者への志向」であり、第三は「共生への志向」である。トインビーは、他ならぬ宇宙における「人間の責任」として、いち早くその総体的な理念の構築につとめ、自ら三者をつなぐ「三位一体」の価値体現者となった、といえよう。

もとより、トインビーを先達とする比較文明学の誕生は、その「二つの枢要価値」を秘めた学的要請と問題解決の自覚に立っている。いわゆる、近代歴史学の一面的な「分析性」をこえる新たな「総合知」の試みである。とりわけ、歴史的な表層の「差異性」をもつつむ、深層の限りない「共通性」を探索する。今日、近代知の限定された分化主義をこえる、全体論的な価値定立と人類共生への叡知は不可欠であろう。ここで、日本の研究動向を一瞥しても、未来を拓く学術研究として、ようやく知の総合と協同

性が提示され、さらに世界史的な視点への関心から人類文明史の全体的な再構築が着手されようとしている。

現に、全人類を一つに結ぶ「地球文明」の時代を迎えている。かつて、トインビーが掲げた「文明の同一性は、差異性よりも根本的である」という命題が、新たな時代の響きをもって甦る。人類史の明暗を分ける希望の道は、なによりも排他的な「主権」の論理に依拠し、かつ独善性に染まるナシヨナリズムの克服にある。トインビーが挑んだ「文明」の設定も、いまなお「生身の神」として蔓延するナシヨナリズムとの訣別にあった。

いま、二一世紀の学的パラダイムとして、そのナシヨナリズムの超克に身を賭したトインビーのたいなる構想力と知的遺産を省察し、新たに「創造への問い」を深める使命と価値は重い。

主要参考文献

- ポリュビオス『世界史一』竹島俊之訳、龍溪書舎、二〇〇四年
 K・ポラニー『大転換―市場社会の形成と崩壊』吉沢英成ほか訳、東洋経済新報社、一九七五年
 S・アミン『不均等発展―周辺資本主義の社会構成体に関する試論』西川潤訳、東洋経済新報社、一九八三年
 R・ロバートソン『グローバリゼーション―地球文化の社会理論』阿部美哉訳、東京大学出版会、一九九七年

- I・ウォーラー・ステイン『近代世界システム―農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』一・二、川北稔訳、岩波書店、一九八一年
- A・ギデンズ『近代性の帰結』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房、一九九〇年
- J・フォークト『世界史の課題―ランケからトインビーまで』小西嘉四郎訳、勁草書房、一九六五年
- 樺山紘一『異境の発見』東京大学出版会、一九九五年
- 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス―西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波書店、一九九三年（『比較文明論』―「伊東俊太郎著作集・10」麗澤大学出版会、二〇〇九年）
- 神川正彦『価値の構図とことは』勁草書房、二〇〇〇年
- 秀村欣二『トインビー研究』（解説）―吉澤五郎、『秀村欣二選集』（三）キリスト教図書出版社、二〇〇二年
- 鈴木成高『世界史における現代』創文社、一九九〇年
- 山本新『トインビーと文明論の争点』勁草書房、一九六九年
- ――『周辺文明論―欧化と土着』（神川正彦・吉澤五郎編）刀水書房、一九八五年
- 梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社、一九六七年（『比較文明学研究』―「梅棹忠夫著作集・1」、中央公論社、一九八九年）
- 秀村欣二・吉澤五郎編『地球文明への視座―トインビーの現代論集』経済往来社、一九九三年
- 秀村欣二監修、吉澤五郎・川窪啓資編『人間と文明のゆくえ』日本評論社、一九八九年
- ――『文明の転換と東アジア』藤原書店、一九九二年
- 米山俊直・吉澤五郎編『比較文明の社会学―新しい知の枠組』放送大学教
育振興会、一九九七年
- ――『比較文明における歴史と地域』朝倉書店、一九九七年
- 伊東俊太郎監修、吉澤五郎・染谷臣道編『文明間の対話に向けて―共生の比較文明学』世界思想社、二〇〇三年
- 川窪啓資『トインビーから比較文明へ』近代文芸社、二〇〇〇年
- 吉澤五郎『トインビー』清水書院、一九八二年
- ――『世界史の回廊―比較文明の視点』世界思想社、一九九九年
- ――『旅の比較文明学―地中海巡礼の風光』世界思想社、二〇〇七年
- Toynebe, Arnold. *A Study of History*, 12 Vols. Oxford University Press, 1934-1961.
- ―― *A Study of History. Illustrated*. Oxford University Press, 1972.
- ―― *Civilization on Trial*. Oxford University Press, 1946.
- ―― *Hellenism—The History of A Civilization*. Oxford University Press, 1959.
- ―― *Change and Habit—The Challenge of Our Time*. Oxford University Press, 1966.
- ―― *An Historian's Approach to Religion*, 2nd edition [with an appendix *Gropings in The Dark*]. Oxford University Press, 1979.
- ―― *Mankind and Mother Earth*. Oxford University Press, 1976.
- ―― *Survey of International Affairs*, 1925 (vol. 1). *The Islamic World*. Oxford University Press, 1927.
- Morton, S. Fiona. *A Bibliography of Arnold J. Toynebe*. Oxford University Press, 1980.
- Montagu, M. F. Ashley. ed. *Toynebe and History*. Porter Sargent Publisher, 1956.

Gargan, Edward, ed. *The Intent of Toynbee's History*, Loyola University Press, 1961.
Anderle, Othmar. F. *The Problems of Civilisations*, Mouton & Co, 1964.